

立ち読み版

# ハーレムクイーン

Harem  
story by takeuti ken

Queen  
illustration by kanna

◆小説 竹内けん  
◆挿絵 かん奈



ドモス

クロチルダ

セレスト

金剛壁

バザン

インフェルミナ

リア

●カリバーン

●アーリア

●ベニーシェ

ネフティス

●マドラ

●バーミア

●ベアトリス

ヴィーヴル

●バタフライ

ヴァスラ

●レナス

●ヤサ

雲山朝

エニ

オレアンダー

ラルフイント

●マリオハール

ティヴァン

●ゴールドマリー

●カンターク

山麓朝

●デミアン

●ラージングラード

リュミネー川

●ゴットリーブ

サブリーナ

●プロヴァンス

オニール

エトルリア

●ロードナイト

シルバーナ

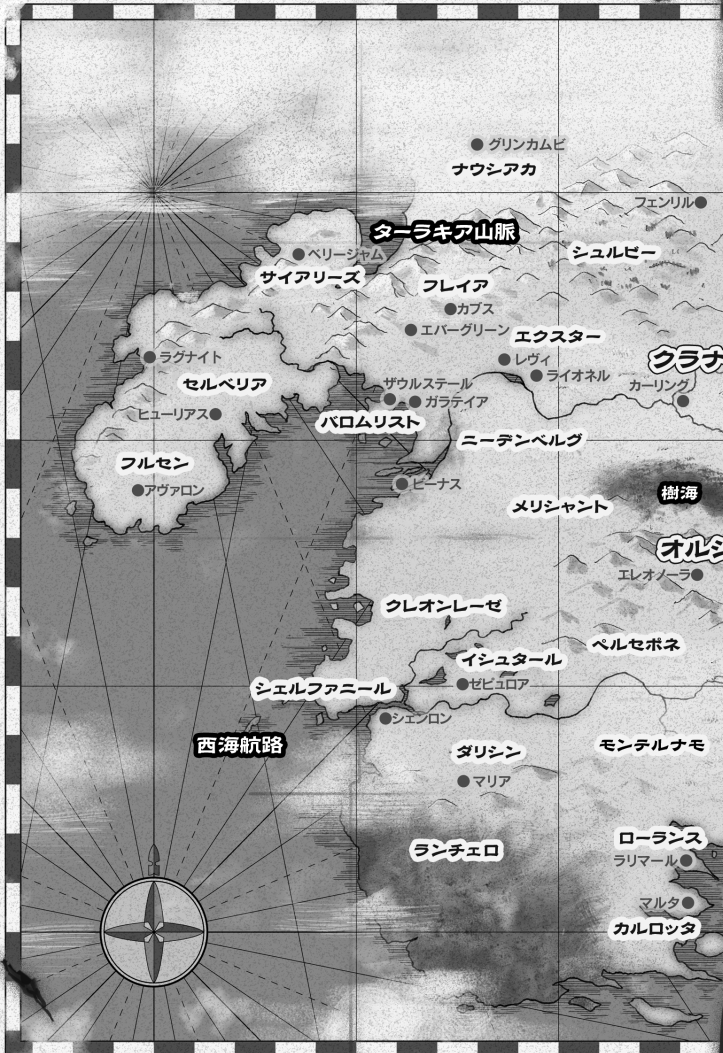
翡翠海

●バルザック

トルフィヤ

●ブラキア

ガルシヤール



● グリンカムビ  
ナウシアカ

● フェンリル

**ターラキア山脈**

● ベリーシャム  
**サイアリース**

シュルビー

フレイア

● カブス

● エバグリーン

エクスター

● ラグナイト

**セルベリア**

ザウルステール

● レヴィ

● ライオネル

**クランナ**

カーリング

● ヒューリアス

**バロムリスト**

● ガラティア

ニーデンベルグ

**フルセン**

● アヴァロン

● ビーナス

メリシャント

**樹海**

**オルシ**

● エレオノーラ

クレオンレーゼ

ペルセボネ

イシュタール

● セビュロア

**シエルファニール**

● シェンロン

**西海航路**

ダリシン

モンテルナモ

● マリア

**ランチェロ**

**ローランス**

● ラリマール

● マルタ

**カルロッタ**

第一章 聖処女王の即位

第二章 朱雀神殿の秘密

第三章 ザウルステール沖の海戦

第四章 事前準備

第五章 聖なる奉納品

第六章 女王陛下の旗の下に

008

052

095

128

168

212



## 登場人物紹介

Characters



### アーゼルハイト

バロムリスト王国の若き女王。カリスマ性のある美少女だがシハラムに対しては大胆な姿を見せる。



### レジェンダ

フレリア王国の姫。踊り子のようなセクシーな姿だが優れた剣士。

### シハラム

バロムリスト王国の指揮官。アーゼルハイトからは「おにい様」と呼ばれている。



### ヴィクトワール

滅亡したセルベリア王国の王女。現在は朱雀神殿で暮らしている。

初めてだからだろう。ヴィクトワールの接吻はぎこちないが、情熱を感じる。

舌を夢中に絡ませあいながら、シハラムの方は両手で伸ばすと、瘦身のわりに大きな乳房を両の手のひらに包んだ。

若々しい乳房がしつとりと手に吸いつく。

それを優しく揉み込む。

左右の指先で、頂を飾る突起を捏ね回していると、堅くシコってくるのがわかった。それをさらに親指と人差し指の腹で抓み、キュッキュツと左右にシゴキ上げる。

「ううう……」

恍惚となったヴィクトワールの口元から、止め処なく涎が溢れて、顎を汚し、胸元にまで垂れた。

清純派の巫女様の唇と舌を存分に陵辱したシハラムは唇を離す。

「ぶはあああ!!!」

接吻を終えるとヴィクトワールは、盛大に空気を食った。

どうやら、まともに呼吸をしていなかったらしい。

シハラムは接吻を、細い顎に流し、さらに首筋を舐め降りて、さらに乳房に達する。

「綺麗なおっぱいだ。まさに禁断の果実だね。この赤い実を食べた鳥は、羽根が赤くなりそうだな」

「ああ……、シハラム様に差し上げます。この身も心もすべて……」

焦らされていると感じたのか、両手でシハラムの頭を抱いたヴィクトワールはのけぞった。

「では、身体が赤くなるかどうか試してみよう」

シハラムはまずは右の乳首に吸いついた。

チュュー……。

「ああ……す、凄い。ち、乳首を吸われるのって、ああ、シハラム様に吸っていただけで幸せですよ」

男の頭を抱いて、乳房を差し出す巫女は、さながら聖母のように目を細める。

乳首を吸われるというのは、女に根源的な幸福感を与える体験なのだろう。

シハラムは遠慮なく、左右の乳首を交互に吸って楽しんだ。

清純派な顔立ちとは裏腹に、身体は今が旬の牝であった。感度は素晴らしくいい。

「ああ、シハラム様に、おっぱいを吸われている。そんなに強く、ああ、夢みたい。淫夢に囚われてしまったかのように……。ああ、夢なら覚めずに、永遠にたゆたっていたいよ」

乳房に対する刺激だけで、ヴィクトワールには十分すぎる快感だったようだ。もうすっかり惚けてしまっている。

一通り乳首を吸って満足したシハラムは、乳房から一旦顔を離す。

「これで、満足したかい？」

「いえ、まだです。シハラム様、今度はこちらを……」

木椅子に座るシハラムの前で、清純派で知られた尼僧は、発情しきった表情で自らの赤い修道服の内にある白いワンピース状のスカートをまくり上げる。

生白く、細く長い生足が晒されて、その最奥には赤いシヨーツが鎮座していた。

「結構派手な下着だね」

「そ、それは……その、神殿のお洒落は下着にしかできませんから……」

ちやうどシハラムの鼻先に、シヨーツがあり、その布地の表面が濡れている。

「まったく、赤い鳥はキミの方だったようだな」

「シハラムという名の狩人に射られたい鳥ですわ。信者の皆さんの前ではこんなことしません。シハラム様が特別なんです」

覚悟を決めたシハラムは両手をシヨーツの左右にかけると、ゆっくりと引きずり下ろす。

「ああ……」

ヴィクトワールは羞恥の悲鳴を漏らしたが、逃げようとはしなかった。

シヨーツの裏地と、ヴィクトワールの股間の間で、ヌラーと透明な液体が長く糸を引く。

陰毛はふわふわとしていて、頭髮と同じこげ茶色だった。

シハラムの鼻先にむっとした牝の匂いが薫る。

シヨーツは足首まで引き下ろして、両足を交互に上げさせて脱がす。それを懐にしまつてから改めて、若き聖女の股間を覗き込む。

ヴィクトワールは反射的に膝を閉じようとしたが、シハラムは許さなかった。

両足の間に強引に膝を入れると、左右に開く。

「ああ……」

蟹股開きで立たされたヴィクトワールは、両手でぎゅっと修道衣の裾を握り締めて耐えた。

シハラムの方は両手を伸ばすと、柔らかい陰毛を掻き分けて、その奥の肉裂に指をかける。

中からかなりの量の液体が溢れており、内腿を濡れ光らせていた。

メラリット、亀裂を左右に豪快に開く。

トロトロトロ……。

中に溜まっていた液体が、滝となって落ちた。

「ああ……」

清楚な乙女の口元から、被虐の溜息が漏れる。

「こんなに濡らして、この赤い鳥はいやらしいな」

「も、申し訳ありません。でも、シハラム様にすべて見せていると思うと……ああ♪」

露出の喜びというやつである。禁忌であればあるほどに、興奮は激しく聖女の肉体を蝕んでいるようだ。

「まだすべてではないよ。すべてとはこういうことをいうんだ」

露悪的に笑ったシハラムは、両手の親指を腭孔の左右に添えると、そこまでも容赦なく

開いてみせた。

「ひい……」

羞恥の悲鳴とともに、中から大量の蜜が溢れ出し、それがなくなると、薄いピンク色の処女膜があらわたくなった。中央に縦に裂けた穴がある。唇状処女膜だ。

「はあ、はあ、はあ……」

おそらく自分でも見たことがないだろう。女の最深部まで視姦されてしまった聖女様は、荒々しく呼吸をしていたが、ふいにシハラムの見つめる鼻先で、包皮の中から淫核がみるみるうちに突起して、赤い嘴くちばしのような形状を晒す。

思わずそれを右手の人差し指で撫でる。

「はう……」

女の急所を捕らえられたヴィクトワールは、ブルリツと震えた。

「ここを自分で触れた経験は？」

「あ、ありません……」

「本当に？」

シハラムの念押しに、ヴィクトワールは言いよどみながらも告白した。

「そ、その……神殿では、百合といますか、レズといますか、同性愛の習慣を持つ方が多くて、わたくしも何度か先輩にやられてしまったことがございます」

「だからこんなに大きいんだね。この小鳥のクリトリスは」

露悪的に笑ったシハラムは、ヴィクトワールの小さな尻を抱き寄せると、剥きだしの陰核にしゃぶりついた。

「あ、そこは!! ……ひい!」

驚いたヴィクトワールは反射的に腰を引いて逃げようとしたが、シハラムは逃がさない。淫核を吸引しつつ、両手で小さな尻朶を捕らえると、強く掴んだ。

しかも、左右に豪快に開き、肛門を露出させてやると、そこに左右から中指を添えた。

「ああ、らめえ、そこは……」

肛門を弄られたヴィクトワールは必死に逃げようとする。それを一旦淫核から口を離れたシハラムが窘める。

「アナルに入れて欲しいんだろ。なら柔らかくしないと」

「は、はい……」

アナルセックスする、という約束である。それを思い出したヴィクトワールは大人しくなった。

それを見て取ったシハラムは再び淫核を口に含み舌で転がしながら、ヴィクトワールの肛門の皺をマッサージする。

「ああ……も、もうダメ……立ってられません……」

断末魔の悲鳴を上げたヴィクトワールは膝から崩れる。シハラムの両膝を跨いだ形で座り込む。



当然、いきり立つ男の象徴が、女の白い下腹部にあたった。それと気づいたヴィクトワールは、意地悪な男に懇願する。

「こ、この……お、お大事を入れてください。わたくしは身も心も、シハラム様に捧げたのです」

「……仕方ないな」

年若い聖女の必死の懇願を聞いてシハラムは、その細い腰を左右から抱いて持ち上げると、いきり立つ逸物の切っ先を、濡れそぼつ膣孔に添える。

「あ……」

又ル……。

亀頭部が軽く埋まった。先端に柔らかい障害物がある。

(これがさつき見た処女膜だな)

赤面したヴィクトワールは身を固くしているだけで、逃げようとはしない。それどころか緊張の中にも期待の表情でシハラムを窺っている。

トクン！ トクン！ トクン！

彼女の高鳴る鼓動が、処女膜を通じて、逸物から伝わってくるかのようだ。

(トロットロだ。まさに入れごろ、食べごろ、犯しごろ、というやつだな。このまま入れても彼女は怒らないだろうな。いや、入れて欲しいのだろうな)

この若き聖女ヴィクトワールのことを好きか嫌いかと聞かれれば、好ましく思う。

昔、ベルンハルトとつるんでいた頃、よく混じってきた彼女のことを、親しい友人という感覚を持っていた。

彼女がここまで自分のことを一途に思っていてくれた、というのは予想外だったが、悪い気持ちはしない。

このまま彼女の処女を奪ってしまったえば、貞淑を重んじる朱雀神殿の巫女としては破門されることになるかもしれないが、そのときはシハラムが責任を持って自分の正室なり、側室にでもしてしまえばいい。

なんだかんだいって、大国バロムリストの筆頭家臣である。

愛人の一人や二人を囲うことぐらいなんでもない。

(しかし、ダメだな。俺には彼女の人生を背負う資格がない)

このままいくとドモス王国との戦争は必至である。

勝てばよし。万が一、負けたときは、軍の最高責任者として自分の首級を差し出すことで、収拾を図る。

それがシハラムの考えているシナリオであった。

(そうなったら、還俗したヴィクトワールは路頭に迷ってしまうことになる)

幼少の頃、自分の意思とは関係なく謀叛の首謀者とされ、多くの人を殺してしまった。そして、自分だけがのうのうと生きている。

生かしてくれたドレークハイトに恩義を感じながらも、自責の念を覚えずにはいられない

いシハラムは、常に死に所というものを考えていた。

姉を朱雀神殿に追いやったからには、自分もまた結婚をすべきではないのかもしれない。そんな思いすら持つ身には、目の前の魅惑的な果実はあまりにも眩しすぎた。

「ふっ」

自嘲の笑みを浮かべたシハラムは、瞳孔の入り口から逸物を抜く。

「あっ、そんな……」

ヴィクトワールの失望の呟きを聞きながらも、逸物の切っ先を菊華に添える。そして、ヴィクトワールの左右の腰を掴むと、押し込んだ。

「あああああ!!!」

処女を奪われたかった聖女様の目が絶望に大きく開かれて、大粒の涙が溢れる。ズブズブズブ……。

自重もあつて、逸物は勢いよく聖女の直腸に呑み込まれていった。とりあえず、入れられるところまで入れたところで止まる。

「はぁ、はぁ、はぁ」

大きく呼吸をしたヴィクトワールが恨みがましく睨んでくる。

「ひ、酷い。どうしても、わたくしを犯してはくださらないのですね」

「アナルセックスだという約束だったろ」

澄ましたシハラムの返事に、頬を引き攣らせながらもヴィクトワールは頷く。

「は、はい。たとえアナルでも、シハラム様のお大事を入れてもらえて幸せです。そう、わたくしなど、所詮、アナルがお似合いの女です。はあ〜」

ヴィクトワールは自棄やけを起こしたように、自ら強引に腰を上下させた。

アナルセックスは初めてでも、膣孔のように処女膜がある訳ではないので、耐えられない激痛ということもないようだ。

ズリズリ。

肛門の入り口。括約筋が強く逸物の肉幹を抜く。

「は、恥ずかしい。アナルに入れられるなど、畜生に劣る扱い。で、ですが……外道ゆえに許される巫女の喜び、ああ……恥ずかしいのに、シハラム様のお大事を入れていただいているのかと思うと、えもいわれぬ心地になります。これが聖女の悲哀なのですね」

セルベリア王国の王女にして、朱雀神殿の司祭。姉の腹心の部下。そんな女性が全身から滝のような汗を流しながら、蟹股開きになり、腰を上下させている。

シハラムは彼女の背中を抱くと、乳首を吸い上げた。

「はあああああ!!! 気持ちいい、気持ちいいです」

神秘的な演出のなされた薄暗い風呂場に、肛虐に涙する聖女の歓喜の悲鳴が響きわたる。(いくら、アナルとはいえ、やってしまったことが、姉上にバレたら激怒されるだろうな?) 美しく気高く聡明。同時に性的なことに潔癖そうなユーフォリアは、部下のこの手のスキヤンダルを許しそうにない。

とはいえ、その背徳感ゆえに男は昂たかぶつてしまう。

「ヴィクトワール、そろそろいくぞ」

「は、はい。わたくしの中に！ 肛門でも構いません！ シハラム様の子種でわたくしの中を満たしてください！」

処女なのに、アナルを掘られてしまったうら若き聖女は、せめてもの情けを懇願した。

「くっ」

呻き声とともに、非情なる男は射精した。

ドビュッ！ ドビュッ！ ドビュッ！

神聖にして不可侵なる乙女の直腸に向かって、男の獣欲が注ぎ込まれていく。

「あ、熱い……」

ヴィクトワールは身を固くして耐えていたが、やがてすべてを吐き出した逸物は、小さくかなり抜け落ちる。

ブルッ！

小さく震えたヴィクトワールの顔から、みるみるうちに血の気が引いていく。

「どうした？」

「も、申し訳ありません。シハラム様、少々用事ができましたので、御暇をください」

「せわしないな。もう少し余韻を楽しんでいけよ」

シハラムは、ヴィクトワールの身体を強く抱き締める。



満足げな笑みを浮かべたレジェンダは唇を開き、ピンク色の舌を伸ばすと亀頭部をペロペロと舐め回す。

「ふう、夢にまで見た、好きな男のおちんちん」

上目遣いにシハラムを窺ったレジェンダは、さらに大きく口を開くと、パクリッと亀頭部を啜ってしまった。

ジュールジュール……。

音を立てて実に美味しそうにしゃぶっている。

おそらく初めてのフェラチオなのだろう。ただしゃぶっているだけ、という感じであり、朱雀神殿の淫乱シスターたちに比べると、技が感じられなかった。

しかし、ここまでやられたら男として止まらない。

「ふう。そんなにセックスしたいなら、しよう。でも、先に言っておくが、俺はキミと結婚するつもりはないよ」

「うん、あたしは好きな男と思いつきり愛しあいたいだけだから」

「よし、ならば、立ってこっちに尻を寄こしなさい」

レジェンダを無理やり立たせると、背を向けさせた。その後ろからシハラムは抱き締め

る。弾力たっぷりの尻の谷間にいきり立つ逸物を押し込みながら、腋の下から両手を入れると、両の乳房を揉みしだく。



(うわ、予想はしていたが、凄い弾力。油断していると弾き飛ばされそうだ)

乳房全体を豪快に揉んでいると、手のひらで乳首がピンピンにシコリ立つのがわかった。それを抓み上げながら、耳元で囁く。

「エロい身体だ。確かにこれでは男なしでは辛いだろうな」

「ああん、やつぱりシハラム様ってドエスなんだ。いいわ、シハラム様に徹底的に調教されたい♪」

被虐の喜びに燃える女の首筋からぼんのくぼに舌を合わせて、背筋を舐めろしていく。綺麗な背中だ。腹部は引き締まり、臀部は瓢箪のように膨れている。

腰を覆う半透明なハーレムパンツをたくし上げようとしたが、裾口が縮まっているので断念。腰から引きずり下ろした。

さらにすぐに引き締まった生尻があらわたとなる。極小ショーツは尻の谷間に完全に埋もれてしまっている。

そのパンツと張りつめた臀部に魅せられたシハラムは、両手で左右の尻朶を揉みしだいたあと、紐ショーツを引きずり下ろし、左右に割った。

「はう！」

女の羞恥に息を呑むと同時に、蕾のような肛門が男の視界に飛び込む。

ついシスターとの遊びの癖で、肛門を弄りたくなかったが、とっさに思い直して、両手の親指で陰唇をメラリと開く。

「はあん♪」

トロトロトロと中に溜まっていた牝汁が溢れて、濃厚な牝獣の匂いが、男の鼻腔を撃つ。否応なく牡欲に支配されたシハラムが、砂漠の花にむしゃぶりつこうとしたところで、レジェンダは悲鳴を上げた。

「あ、ちよつと待った！」

「どうした。いまさら」

今までやられたいと散々にごねていた女の抵抗に、シハラムは戸惑う。

尻を捕らえられている乙女は、顔を薔薇のように赤くしながら言い訳する。

「いや、その、なんだ。忘れていた。あたしは、今日の戦いから今までシャワー浴びてないのよ」

「気にするな。俺も浴びてない」

容赦なくラビアを開いたまま、シハラムは応じる。

「いや、そうじゃなくて。だから、その……、あの女との一騎打ちは怖くなかったんだけど、やっぱ、あんな狭い渡し板の上で大立ち回りを演じたのは怖かったのよ。だから、その、ちよつと、ちびったの忘れてた」

羞恥に悶える女の告白に、シハラムは失笑した。

「どおりで臭いと思った」

「やっぱり!?!」

「冗談だ。男を誘ういい匂いしかない」

目を剥くレジェンダをからかったシハラムは無言を言わずに、砂漠の薔薇に吸いついた。

ジュールジュールジュール……。

「あ、ダメ、そ、そんなところ、吸ったら、あああ、臭い、臭いの……ああ、恥ずかしいのに、気持ちいいい〜♪」

船先に立ったレジェンダは、夜の海に向かって吼える。

柔らかい粘膜を隅々まで舌を這わせたシハラムは、淫核はもちろん、膣孔も舐め穿る。

「あ、ダメ、おかしくなる、おかしくなっちゃう！ もう、もうイっちゃう!!!」

船の先端にしがみつき、腰から崩れそうになるレジェンダを、立ち上がったシハラムが抱き締める。

「まったく、困った姫様だ」

「姫じゃないわ。ただの女。好きな男と一つになりたくて、パタパタしている哀れな牝だから、姫ではなくて、名前を呼んで」

その要望にシハラムは答えることにした。

「レジェンダひ……。レジェンダ。入れるぞ」

「ええ、シハラムのちんぽでぶち抜いて」

女の要望に応えて、両手で船縁にしがみついて、尻を突き出す女の背後から、いきり立

つ逸物を膣孔に押し込む。

プチリ。

「くっ」

今まで遊び感覚で淫らに振る舞っていたレジェンダが、身を固くしたので、シハラムはいささか氣遣った。

「大丈夫か？」

「大丈夫よ。あらかじめ痛いってわかっていたことだし……でも、好きな男のちんぽでぶち抜かれたと思うと、この痛さも愛おしいというか、楽しめるわね」

さすがは快樂主義者といったところか。

成人女性である。男性器を受け入れる器として完成していたのだろう。

ちなみに二十代も後半になってから破瓜はかをするときは、処女膜硬化というものを起こしていて、それはそれで痛みが激しいものなのだという。

つまり、二十歳のレジェンダの身体は大人であり、処女膜も堅くなっていない。犯しごろの旬の牝の身体ということなのかもしれない。

（しかし、きついな。これが破瓜の瞬間か）

シハラムは、朱雀神殿の未亡人シスターと遊び、ヴィクトワールの肛門の処女を奪ってきた訳だが、普通に処女を奪ったのは初めてである。

（これもなかなか悪くない。いや、なんだこのザラザラ感覚は……まるでヒトデにでも包

まれているみたいだ)

油断していると、あつという間に絞り取られそうである。

(オマ○コも王女様となるとものが違うのか。いや、王女様云々ではない。単にレジェンダが名器の持ち主だったというだけか。ってヤバイ。このままでは、あつという間に絞り取られる。それでは格好がつかないぞ)

戦のあと、男が昂るといふのはやはり本当なのだろう。かつてない獣欲に駆られたシハラムは、相手は初めての女であり、優しくすべきだと頭ではわかっていたのに身体を制御できなかった。

「初めてだつてわりには、ずいぶんといい具合に感じているな。見た目通りエロい身体だ」  
嗜虐的に笑ったシハラムは、欲望のままに腰を使い始める。

パンッ！ パンッ！ パンッ！

夜の海に女の尻と男の腰がぶつかりあう音が消えていく。

「あん！ あんっ！ あん！ 奥っ、奥まで入ってくる、あんっ！ 凄い、征服される。征服されちゃう♪」

レジェンダの嬌声を聞いて気をよくしたシハラムは、両側から押さえていた尻から手を離すと、今度は両の乳房を鷲掴みにした。

「あ、これヤバイ。ちんぼぶち込まれた状態で、左右の乳首を弄られるの最高♪」  
シハラムは乳房の形が変わるほどに揉み込み、勃起している乳首を抜き立て、女の腰を

砕かんばかりに激しく突き上げる。

「ああ、こんな気持ちいいだなんて、王女様をやめてよかった、と思えるわ。好きな男と好きなだけセックスを楽しめる」

本当にエロい女である。セックスを心から楽しんでいることが伝わってきて、男としては実に犯し甲斐を感じる。

「こうやって幸せを噛み締めていると、アーゼルハイトに少し同情しちゃう。あの娘は心底、惚れている男に貫かれることは生涯ないんだからね。ただ側で指を啜えて見ているだけ」

「なんのことを言っている？」

「うふふ、気づかなくていいの。シハラム様はあたしの身体で遊んでいればいいんだから」  
レジェンダの意味ありげな台詞にいささか気分を害したシハラムは、お返しをすることにした。

「レジェンダ、気づいているか？ 俺たちのことを覗いているやつらがいるぞ」

「えっ!？」

耳を澄ますと会話が聞こえる。

「うわ、やつぱ、戦に勝って美姫を抱く、これぞ万国共通の英雄の特権だね」

「ちよつと、マリオン声がでかい。聞こえるって」

「そうそう邪魔したら悪いわ。今いいところなんだから」

何やら三人娘の批評が聞こえてくる。レジェンダの耳にも聞こえたのだろう。耳まで真っ赤になる。逆に気を昂らせたシハラムは、見物人の女たちの声がある方向に向かって、レジェンダの右足を豪快に上げさせた。

「ひい」

女の身体は左右をアンバランスにすると性感がさらに高まる。その上、結合部を見知らぬ観察人に晒したのだ。

「どうした？」

「どうしたって……うっやっぱりドエス」

羞恥に頬を赤くしたレジェンダは、両肘を手すりに乗せて上体を支えながら、右手の親指をベールの中に突っ込んで、唇で噛む。

「どうやら、せめて、喘ぎ声を我慢しようという判断のようだ。」

そんな女のこざかしい抵抗を粉碎しようと、シハラムは右手で、レジェンダの太腿を抱えながら、左手で乳房を揉み、腰は容赦なく抽送する。

「ひい、ひい、ひい」

喘ぎ声を上げまいと、口を閉じることで、下の唇まで締まってしまふのか、実に締まりのいい肉洞だ。ザラザラの贅肉が、キュッキュツと肉棒を締め上げる。

「くっ、そろそろイクぞ」

「う、うん……」



隠れて見ている同性たちの視線が気になるのだろう。レジエンダは言葉少なく頷く。

シハラムの方はいっさいお構いなく、彼女の最深部に向かつて、欲望を吐き出した。

「へえ、あ、凄い！ 脈打っている。脈打っているの。ああ、もう、ダメ、ひいー！ 熱いの、熱いのキター!!!」

ドクン！ ドクン！ ドクン！

破瓜に続いての初めての膣内射精。それも見知らぬ同性に見られながらの、初体験だ。理性がぶっ飛んだような悲鳴を上げる。

ブシャツ！

右足を犬が小水をするように上げていたレジエンダは、水風船でも爆発させたように潮を噴いた。

「はあ、はあ、はあく、気持ちよかった。これで、もう、あたしはシハラム様の女ね」

逸物が小さくなったところで、レジエンダは器用に逸物を支点にして身体を反転させた。そして、至近距離から、シハラムの顔を覗き込む。

「ああ」

「あたしは祖国を喪失したけど、男を得られた。これだけで生きる希望が湧いてくるわ」  
体内に啜え込んだ逸物を決して逃がすまいとするレジエンダに、これは早まったかもしれない、といまさらながら後悔を感じるシハラムであった。



シハラムの懇願は無視され、アーゼルハイトはさながら猫がミルクを舐めるが如く執拗に男の腋の下を舐め回した。

「ああ、これがおにい様の匂いですのね。た、たまりませんわ♪」

男の腋の下を舐め回しながら、高く掲げられた尻が、クネクネと左右に揺れる。

やがて満足して顔を上げたアーゼルハイトの顔は、まるで酒にでも酔ったかのように赤くなっている。

実際に、処女娘が初めて嗅いだ牡の匂いに酔ってしまったのだろう。

「うふふ、おにい様はわたくしのモノですわ。そのことを今、その身に刻み込んで差し上げます」

そう嘯いたアーゼルハイトは、白い歯を剥いた。

そして、カプリと男の胸にかぶりついてくる。

「こら、噛むな。痛いから」

驚くシハラムの胸に、アーゼルハイトはガツガツとその凶悪な歯を立てていく。

「うふふ、おにい様の肌に、歯型が付きましたわ。このような暴拳が許されるのはわたくしだけですわね」

確かに朱雀神殿の未亡人シスターや、レジエンダ、ヴィクトワールがこのような暴行を行ったなら、ただちに振り払ったことだろう。相手がアーゼルハイトだからこそ、痛くても我慢した。

「うふふ、おにい様はわたくしに逆らうことができない。なぜなら、わたくしが女王で、おにい様より偉いからですわ」

さながら血を吸ったあとの女吸血鬼のような恍惚とした笑みを浮かべたアーゼルハイトは、ゾクゾクすると言いたげに身震いする。

それから立ち上がった。

シハラムの頭を跨いで立つと、両手で青いスカートをたくし上げる。

「おにい様、見て」

細く長い足の付け根は、青いお洒落なシヨーツに包まれていた。そのまたぐり部分には大きな染みができている。

いや、白い太腿の内側を幾匹もの小さな蛇のように、透明な液体が這っていた。

「っ!？」

まさに発情している牝の下半身を見せつけられて、シハラムは生唾を飲む。

「うふふ、おにい様のせいでこんなみつももないことになってしまいましたわ。バロムリストの女王たる身が、まるでお漏らししたみたいで、恥ずかしいですわ」

恍惚とした表情のアーゼルハイトは、指先でシヨーツの上から股間を撫でる。

「責任取ってくださいますわよね」

「ああ」

「前回のよう指でクリトリスだけを弄るといのはナシですわよ。わたくしのオマ○コ

を隅々まで舐めてくださいましね」

両手をスカートの中に入れたアーゼルハイトは、青いシヨーツをスルスルと下ろした。シハラムの鼻先にまで濡れて匂い立つ布切れを下ろしてから、片足ずつ上げて、抜き取る。

シヨーツを投げ捨てたアーゼルハイトは、両手で股間を押さえながら質問してきた。

「ああ、おにい様、舐めたいですか？ わたくしのオマ○コ」

「ああ、舐めたい。舐めさせてくれ」

「仕方ありませんわね。おにい様の願い、叶えて差し上げますわ」

どう見てもアーゼルハイトの方が、もはや我慢の限界といった風情だが、どこまでも傲慢に膝を開いて、腰を下ろしてきた。

シハラムの眼前で、股を開いて腰を下ろし、蹲踞の姿勢になる。

当然、シハラムの鼻先に、珊瑚で作られたような陰唇がくる。

ポタポタと熱い滴が、シハラムの頬にかかった。

発情しきった牝の生殖器に、シハラムは顔をつけようとしたが、その額をアーゼルハイトに手で止められた。

「まだ舐めてはいけませんわよ」

美味しい肉を、犬の前に放り投げて、「マテ」を命じている。

そんな風情で、女王様は嗜虐的に舌舐めずりをした。

「このあいだ、おにい様がここを集中的に悪戯したせいで、形が変になってしまいましたわ。よく見てご覧なさい」

前回は完全な包茎だった淫核だが、今は中身が顔を見せていた。どうやら、仮性包茎に成長してしまったようだ。

まるで鬼の角のようにニョキと顔を出している。

「それはすまないことをした」

「本当ですわ。まったく責任を取っていただけかないと……」

男の鼻先で蹲踞の姿勢となり、淫核はもとより、尿道口、膣孔、さらには処女膜まで晒しながら、アーゼルハイトは、嗜虐的に微笑む。

ヒクヒク。

真円環状処女膜が開閉し、中から糸引く濃密な液体が滴り、男の顔を汚す。

「おにい様にそこを弄られると、わたくしが気を変になってしまいますから……好きにはさせないわ」

前回のクリトリス一点責めで、よほど懲りたらしい。

「だから、舌をお出しなさい。わたくしが勝手に腰を使わせてもらうから」

「承知しました」

シハラムは素直に舌を出した。

「それじゃいくわよ。あ、はん♪」

膝を開いたアーゼルハイトは腰をさらに落とす。濡れた陰唇が、シハラムの顔を覆う。濃厚な牝の匂いで顔中を覆われる。

その状態でアーゼルハイトは腰を前後に動かした。

「あは、いい、いい感じですよ。おにい様の顔が、わたくしの垂れ流す液体で、ドロドロになってる。あは♪」

いわゆる顔面騎乗というやつであろう。

男の舌や鼻に、アーゼルハイトは自らの敏感な部分を押しつける。

サラサラサラと薄い陰毛でシハラムの顔が掃かれた。

「あ、あや、これって、まるでおにい様の顔を使ってオナニーをしているみたい。あの誇り高いおにい様が、わたくしの股の下で、こんなだらしなことになるなんて、あはっ、こんなところを許されるのは女王たるわたくしだけですわ」

男の顔面に思う存分、陰唇を擦りつけて軽い絶頂に達したのか、満足したらしいアーゼルハイトは、動きを止めた。

そして、背後を窺う。

「高潔ぶっているくせに、おにい様だったら、ほんと変態なんだから……」

腰を下ろしたまま身体を反転させたアーゼルハイトは、両手を伸ばし、男のズボンから逸物を引っ張り出した。

「うふふ、これがおにい様のおちんちん、なんてイヤらしい形なのかしら♪」

肉幹を左手で持ったアーゼルハイトは、右手で顔にかかる頭髪をpushさえながら、亀頭部に顔を近づけた。

「ねえ、おにい様、このおちんちんでいったい、何人の女を泣かせてきたの？」

「さあ……」

「数えきれないほどつてことですか？ まあ、いいですわ。本日は特別の好意でわたくしが舐めて差し上げます」

ペロリ。

クールで怖いほどに整った美貌のアーゼルハイトは、亀頭部の先端を舐めた。

「うふふ、美味しい♪」

どうやら、先走りの液を掬い飲んだようだ。

満足げな声を出したアーゼルハイトは、次いで亀頭部全体を舌尖で舐め回し始めた。

「ピチャリ、ピチャリ、チュルリ、ジュルリ……うん♪」

初めての舌技だろうに、なかなか上手い。いや、どんどん上手くなっていく。

（頭のいい女は、フェラチオ上手だ、と言われるからな）

たちまちのうちにコツのようなモノを掴んだのか、カプリと亀頭部を呑み込むと、ジュルジュルと卑猥な音を立てながら頭を上下させた。

それでいて、口が外れないように、肉冠の裏の部分で、唇をきっちり止めている。

「ふむ、ふむ、ふむ……」



技術は上がっていくが、口取りに集中するあまり、腰を動かすことは出来ないようだ。切なげに震えている。

見かねたシハラムは、その尻を抱え寄せて、陰唇を舐めた。

「うぐっ！ うむっ！ うむっ！」

口が塞がっているアーゼルハイトは、驚いたようだが、止めようとはしなかった。そこでシハラムは入念に、処女陰唇を舐め回してやる。

アーゼルハイトもフェラチオをやめないから、女上位のシックスサインだ。

「ぷはっ」

ふいにアーゼルハイトは逸物から口を離した。

「さすがはおにい様ですわ。わたくしだって負けませんよ。知っているんですから、殿方がどうされると喜ぶか？ うふふ、おにい様もイチコロですわ」

そう嘯いたアーゼルハイトは、自らのスレンダーな体躯とは裏腹に、凶悪なまでに前方に飛び出て、しかも重力に圧勝している乳房を、左右から抱き寄せた。

そして、いきり立つ逸物を胸の谷間に抱き抱える。

（こ、これは……っ!!）

弾力に満ち満ちた双乳の間で、逸物が揉みしだかれる。

「うふふ、おにい様だったら、ほんと、どうしようもなくいいかっこしいんだから。素直にわたくしのおっぱいの中で果てるといいわ」

誰に教わったのか知らないが、なかなか練達なことである。

アーゼルハイトは、単にパイズリしているだけではなく、乳房の狭間から飛び出す亀頭部を舐めしやぶった。

シハラムの方としても負けていられない。

膣孔に舌を突っ込んで、処女膜を舐め回しつつ、会陰部を指で揉みしだき、剥きだしの淫核も捏ね回した。

「あん、そんなところまで舐めるなんて、ああ、このバター犬！ 躰がなっていないせんわ。あん、そんなケモノ！ ケダモノ！ インモラルアニマルう~~~~♪」

強気な性格とは裏腹に敏感体質の女王様は、潮を噴きながら絶頂してしまった。それに合わせて、シハラムも絶頂する。

辜丸から溢れ出した、熱い血潮が肉棒を駆け上がり、誇り高き女王様の鼻先にある小さな孔から勢いよく噴出する。

どくん！ どくん！ どくん！

「ああ、ああ、あああ……」

ちよūdど絶頂中で、身をのけぞらせていたアーゼルハイトの美顔が白濁に染まる。

「はあ……、はあ……、はあ……」

男の上で潰れた蛙のようになってしまったアーゼルハイトは、半萎えの逸物に顔を埋めてしばし余韻に浸っていたが、やがて理性を取り戻すと、あたりに散らばっていた白濁液

を舐め取り始めた。

「こちら、女王様はそんなことをしなくていいんだぞ」

「いいの。おにい様の精液はわたくしのものなんですから……」

アーゼルハイトは半萎えの逸物を口に含み、尿道に残っていた残滓まで搾り取った。おかげでアーゼルハイトが口を離したときには、逸物は何事もなくそり立ってしまった。

「うふふ、さすがはおにい様、絶倫ですわ」

満足げに頷いたアーゼルハイトは、シハラムを窺う。

「お遊びはここまでですわ。そろそろ本番といたしましょう」

「ああ、そうだな」

外では、大勢の人が、聖処女王の破瓜の報告を、今か今かと待ちわびているのである。そうそう待たせる訳にもいかないだろう。

「あ、おにい様は、そのまま仰向けになっているといいわ。自分で入れさせてもらうから」  
「そ、そうか……」

初めてなのに騎乗位で入れるのは難しいと思うのだが、本人がやりたい、と言っているのだから、止めるのも憚られる。

シハラムは好きにさせた。

いそいそと身を起こしたアーゼルハイトは、シハラムの顔を見ながら蹲踞の姿勢となり、いきり立つ逸物の切っ先を自らの陰唇に添えた。



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

# ハーレムシリーズ

## 公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、  
「歴史年表」「人物相関図」  
等々あの超人気シリーズの  
世界観を網羅した  
**完全ガイドが登場!!**

特別描き下ろし  
イラストも多数収録!



*Now On Sale!!*

A5判/定価990円(税込)



特設サイトはこちらからアクセス!!



<http://ktcom.jp/harem/>

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな  
ハーレム系ライトノベル!

二次元  
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!  
かなり過激なライトノベル!

二次元  
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※盗作・転載・無断複製は厳禁です。著作権者・発行元・編集者・デザイナーの許可なくしては、本誌の複製・転載・無断複製は厳禁です。

日常に密着したエロス、リアルな  
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?  
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの  
公式サイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!